

書評

Jouni-Matti Kuukkanen

Postnarrativist philosophy of historiography (Palgrave Macmillan, 2015)

本書は歴史哲学を近年席卷してきた歴史の物語論への批判を意図した著作となっている。本書は歴史の物語論の主張を次の二点に要約する。

歴史書の全体は個々の文が持たないような統合的な観点 (view) を持つ。

この統合的な観点は一種の文学作品であり合理的な評価を行うことはできない。

本書はこれらの主張のうち、前者、すなわち、本全体に生じる統合的な見解に注目すべきであるという主張を支持する。その一方で、後者、すなわち、本全体が持つ観点を一種の文学作品とみなし、それに対しては美学的・道徳的な評価しかできないとする物語論の主張に反対し、本全体が持つ見解を認識論的にすることが評価がいかに可能であるのかを示そうとしている。これが表題の「物語論以後」が表現する本書のスタンスである。

本書のスタンスにとって他に重要なのは、本書が科学哲学の一部としての歴史学の哲学を構想している点である。歴史哲学 (philosophy of history) という表現には、歴史の過程を考察の対象とする哲学と歴史研究を考察の対象とする哲学という二つの含意が存在することを指摘し、歴史学を対象とする科学哲学という後者の土俵に自らの議論を定位する。このような設定にふさわしく、先行研究に比して詳細な事例研究が本書の特徴となっている。この意味で表題は「物語論以後の歴史学の哲学」と解するべきである。

本書の構成は大まかに次の通りである。序文に続き、2章と3章において、歴史の物語論が登場した経緯がまず整理され、加えてその主張が3点に整理される。次いで4, 5章において、それらの主張のうち2点に批判が加えられる。6, 7章において、統合的な観点を評価する規準として道徳的ないし的美学的な規準のみを認める議論に反論し、認識論的な評価の規準が提出される。8, 9, 10章において、歴史記述が真理であるかない客観的である、あるいは歴史的出来事が実在するといった表現が何を意味するのかという問題に答えようとしている。以下では10章を除く章をごく簡単に紹介する。

2章と3章において、以後の章での批判に向けて物語論の要約が行われる。まず

2 章では、歴史の物語論が登場した経緯が簡単に確認される。この経緯の整理を通じて、*Metahistory* によって以後の物語論に多大な影響を与えたヘイドン・ホワイト (Hayden White)、および *Narrative Logic* の著者であるフランク・アンカースミット (Frank Ankersmit) の二人に物語論の主張を代表させる。

3 章では、ホワイトとアンカースミットの議論をもとに、物語論の主張を表象主義 (representationalism)、構築主義 (constructivism)、全体論 (holism) の 3 点に要約している。本書において、表象主義とは、歴史記述にとって、歴史記述の本質的な機能を過去を映すという表象作用に求める見方だとされている。二人はともに、歴史記述がありのままの過去を写すという見方を否定しているものの、彼らによる歴史記述の分析は歴史記述が表象であることを強調している。この点において、彼らの主張には歴史記述の本質的な機能は過去を表象することであるという前提が存在することを指摘している。構築主義とは、本書において、物語は実在の反映ではないという主張を意味している。彼らは個別の出来事の実在を否定することはせず、個別の出来事を物語へと組織化する物語が過去の実在の反映であることを否定していると彼らの議論を整理する。全体論とは、個別の出来事の組織化によって生まれる物語は、全体として理解されなければならないとする主張である。本書の整理よれば、この主張から、物語は全体として理解される必要があり、分解すると同一性が失われてしまう (分解不可能性)、物語が真であるのは物語の全体として与えられる定義によってである (分析性)、物語は反証不可能である (反証不可能性)、以上 3 点が帰結することになるという (この点はアンカースミットの議論のみの要約となっている)。

続く 4 章、5 章において 3 章で要約された主張の批判が行われる。4 章では表象主義と命名された、歴史記述にとって表象作用が本質的であるという主張が批判の対象となる。その批判の骨子は、表象主義を放棄した方が哲学的な問題が少なく済むという点にある。本章の要約によると、アンカースミットの議論においては、表象は表象されるものの複写 (copy) ではなく、表象は独自の「側面 (aspect)」を持つことになるという。ところが、この側面概念が問題含みであり、過去の実在ではないが表象される側面とはこの世界のどこに存在するのかという問題が生じると論じる。一方、歴史記述が過去を表象するという前提自体を放棄すれば、この問題は生じないという。では歴史記述の真理性をどう捉えるかが問題になるが、これは 8 章の問題となる。

5 章で反駁の対象となるのは、要約された 3 点のうち分解不可能なものを歴史書の全体が持つという全体論の主張である。事実の列挙にとどまらない観点を含む主張を歴史書が持つことを認めつつ、この主張は歴史書という表象が持つ分解不可能な全体

ではなく、論証により支持される主張なのだと論じる。この議論の前提として、観点を含む主張について、その意味の理解とその論証の理解とをまず区別する。事例として E・P・トムスン『イングランド労働者階級の形成』が持ち出される。この本の中心的主張を、「1780-1832 年にかけて労働者階級がほぼ自生的に (spontaneously) 生まれた」と要約し、この主張の意味を理解するために、本のすべての構成要素が必要になるはずはないと論じる。むしろ、この主張の意味はそれ単独では理解できないとはいえ、主張の論拠になる事実と理解のために必要な背景知識は区別可能であるとする。

他方、論証については、歴史書が文学的な物語ではなく、合理的根拠によって中心的主張を支持するような論証になっていることを指摘する。トゥールミンによる法理学に依拠した証拠のモデルを援用しながら、歴史書は証拠を連結することによって中心的主張を支持するような構造を作ると論じる。この分析によると論証の中で意味を持つ主張をする際には事実に関する経験的なデータにさかのぼって根拠を与える必要がある。歴史書の論証がこのような構造を持つことを、E・P・トムスン『イングランド労働者階級の形成』と Christopher Clark *The sleepwalkers* —¹ における論証の検討を通じて主張している。このようにして歴史書の全体は、統合的な視点を全体として示す表象ではなく、中心的な主張とその根拠を提示する構造を持った論証として理解されることになる。

6 章と 7 章においては、ホワイトとアンカースミットらの物語論が統合的な観点を認識論的に評価する可能性を拒絶していることへの反論がなされる。6 章においては、歴史学における統合的な概念は実在の反映ではないと論じている。「ルネサンス」や「冷戦」など、一定の時期や出来事を統括する概念を導入することが歴史学では行われる。このような現象に関しては、Walsh, Danto, Mink らによって異なる用語で論じられていることを確認しつつ、Walsh がウィリアム・ヒューウェルから拝借した *colligation* という用語を用いている。先行研究を踏まえて *colligation* の特徴を整理しながら、これはあくまで一種の分析の道具なのであって、実在性を持つと考える方が不自然であり、道具だと考えることは歴史学が経験的学問であることを妨げないと論じる。

7 章では、*colligation* に関する認識論的評価がいかなされるかを論じている。*colligation* は正当化の役割を担う認識論的価値により比較評価が可能であると主張し、その評価の基準となる認識論的価値として、例化 (*exemplification*)、整合性

¹ Clark, C. (2012). *The sleepwalkers: How Europe went to war in 1914*. Penguin UK.

(coherence), 包括性 (comprehensiveness), 範囲 (scope), 独創性 (originality) の 5 つを挙げている。なお、歴史学における colligation に関して決定不全の問題が生じることを認めつつ、これは自然科学についても同様であり、歴史学の客観性を揺るがすものではないと論じる。総括として、colligation については、実在との対応は無いが、経験的なデータと合理的な基準によって比較可能としている。

8 章と 9 章では歴史的真理とは何を意味するのかについて論じている。8 章においては、真理の対応説は歴史記述に適用できず、むしろ、根拠付けられているという性質を歴史学における主張に認められるかが重要になると論じる。9 章においては、根拠付けられているという概念についてさらに分析を行っている。思想史の方法論に関する研究で知られるクエンティン・スキナーの議論を援用しながら、歴史学の研究書は主張という発話行為を行っているといえ、歴史学における研究が根拠づけられているとは、蓄積されてきた議論の文脈において主張という発話行為が成功することなのだと論じる。他方で、ポストモダン史学の代表格であるキース・ジェンキンスに対し、真理の対応説が歴史記述に適用できないことを根拠に極端に相対主義的な主張するのは誤りだとして批判を行っている。なお、10 章では、客観性、実在、合理性の問題について論じているが煩雑になるためここでは紹介しない。

以上、駆け足で本書の論述を概観してきた。物語論の独自の整理に基づく議論を展開する本書は、問題提起の書としては十分な仕事を果たしていると言えるだろう。もちろん、個別の論点にとどまらず物語論の要約や問題設定に関しても様々な異論があると思われる（筆者はおおむね同意している）。しかしながら、そうした物語論への総括の仕方や論点の設定を含め、歴史哲学および歴史理論に大きな問題提起を果たしていることは疑いない。その意味で、歴史哲学や歴史理論に関心を持つすべての人に読んでいただきたい一冊である。

(苗村弘太郎, 京都大学文学研究科科学哲学科学史専修修士課程)